

エコノミスト・ビル 1964年 アリソン&ピーター・スミッソン

都市内アメニティ空間の創出

チームXの活動を中心的に担ったのは、英国のアリソンとピーターのスミッソン夫妻である。夫妻は、子どもたちが路上で遊ぶ写真を見て啓発され、生活空間としての街路に注目し、集合住宅の廊下を街路に見立て、単なる動線としてではなく、住民同士の出会い空間と捉え直し、住居入口前に繋ぎの空間を設けることを1952年のコンペで提案した。オランダのファン・アイクはそれをもとに「中間領域」概念を導いた。英国ではその後、大規模な集合住宅団地において、街路に見立てた開放廊下・空中街路を3層ごとに設け、複数棟を貫通させることが盛んに実施された。

そのスミッソン夫妻が手掛けた代表的な建築が、エコノミスト・ビルである。場所はロンドンの商業の中心地、ピカデリー・サーカスから西に数百mの緩く南に下るセント・ジェームス通りに面する。歴史ある通りで、6階建前後の建物が街並みを形成する。

法規的制約が種々あり、以前建っていた建物の容積を超えることはできず、周辺との調和はもとより、高層にする場合は何らかの都市への貢献が求められ、かつ、少し離れた公園からの景観上の制約も厳しく規制されている。

そのような制約条件を前提に、1棟建てを避けて分棟にし、新規の3棟と隣接既存建築の一部増築で構成している。通りに面する棟は街並みに合わせて高さを抑えた銀行棟、その奥に周辺より抜き出た高いエコノミスト・ビル、並べて高さが異なる住居棟の配置である。

すべての立面は、灰色で幾分粗目の石を貼った柱、梁、架構現わしで、そこに大きなガラスが嵌められている。周辺の様式主義的な建築に材質、色調やスケール感で同調しつつも、差異化した現代性が感じられる建築になっている。

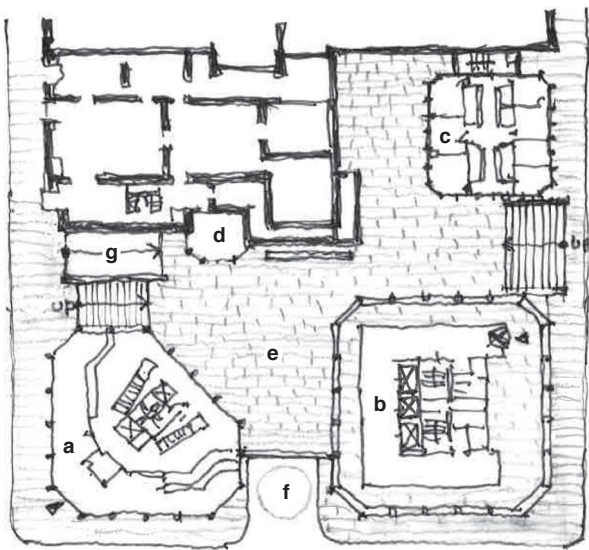
特徴は、複数棟の間を、路面から半階上げて誰もが通り抜けられる歩行者デッキ、小広場を設けたことだ。下は駐車場である。

夫妻は、'58年に行われた東ベルリンの都市計画コンペにおいて、成長と変化に対応するインフラ・ストラクチャーとして、地上の道路は車に当て、その上部に網目状に張り巡らす歩行者デッキを提案した。そのコンセプトの切片と思われなくもないが、ここでは、1ha足らずのミニ開発であり、そのような俯瞰的都市像からの発想というよりは、眼目は外部空間であり、集合住宅の廊下の提案のように、市民、生活者目線でのアメニティ空間の創出と言える。

日本でも'66年に、分棟配置してプロムナードを既成市街地に組み込んだ埼玉会館（前川國男）と代官山ヒルサイドテラス第I期（槇文彦）が完成し、既存市街にアメニティを求める動きがある。その世界的気運の先駆けである。



セント・ジェームス通りからの外観 手前4階建に見えるのが銀行棟
左手が半階上りの小広場への入口。奥の高層棟がエコノミスト・ビル



配置平面図 左側がセント・ジョーンズ通 a銀行棟.1階一部は商店、レストラン bエコノミスト・ビル c住居棟 d既存クラブの増築部分 e 通り抜け小広場 f駐車場入り口のターンテーブル g斜路



通り抜け小広場



裏側/バー通りからの入り口